

歳時記のある暮らし

二〇二二年 《十二月》

早いもので本年も残すところ、あとわずかとなりました。

皆様、おすこやかにお過ごしでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。

木枯らしが吹き、枝だけの木立が目立ちます。熊は冬ごもりを始め、海では大きく育った鮭がふるさとの川に帰ります。天地の陽気はふさがったように見えますが、はるかかなたの天体では冬の星座が煌めきます。年の瀬の慌ただしさと新年への希望が同居するこのころ、夜空の星を見上げて一年をふり返り、星にどんな願いをかけましょうか。

おおいぬ座のシリウス、オリオン座のリゲル、おうし座のアルデバラン、ぎょ座のカペラ、ふたご座のホルクス、こいぬ座のプロキオン、これらの一等星を結んでできる六角形の「冬のダイヤモンド」が輝き、十三日や十四日の深夜には、ふたご座からの流れ星が二時間から二十個から三十個観られそうです（ふたご座流星群）。八日は「針供養」。諸説ありますが、古針や折れ針に、労いと感謝、裁縫の上達への願いを込め、せめて最後はやわらかいものと、豆腐やこんにゃくなどに刺して供養し神社に納めます。

十三日は「正月事始め」。煤払い、松迎え、餅つきなど、この日からお正月に年神様をお迎えする準備を始めます。煤払いは大掃除に通じ、平安期に宮中で始まりました。平安時代、道具類は百年経つと付喪神（つくもがみ）という妖怪に変化するといわれ、そのために古道具類を年の瀬に捨てる風習がありました。一方、年末に神社仏閣の境内で「蚤の市」が立ち、古道具を使ってくれる人にゆすり渡すことで道具に新しい命を与え、付喪神がつかないようにしました。大掃除がリサイクルのきっかけになることや、年末の蚤の市は今も昔も変わりはないようです。

二十日は冬至。夜が最も長く、昼が短くなる日。この日は太陽の力がいちばん弱まり、この日を境に再び力が甦ってくるという意から「陽来復（いちようらいふく）」という言葉が生まれ、転じて、悪いことが続いたあとに幸運に向っていくことを意味するようになりました。

古くから冬至には世界中で祝祭が盛大におこなわれました。クリスマスも冬至の祭とされることがあります。実は、聖書にはイエスキリストが生まれた日の記述はなく、この日を

（裏表へ続きます）

降誕祭として祝うようになったのは、ヨーロッパの土着信仰として根付いていた冬至の祭りだとする説もあり、人々の太陽の廻りを願う気持ちの強さがわかります。

冬至には、柚子湯に入ると風邪をひかないといわれます。冬に熟す柑橘類には、きんかんや柚子などがあり、きんかんは古くからせきやなどの痛みを鎮めるために重用されてきました。柚子は香りが高く、ビタミンCや、血流改善を促すとされるヘスペリジンなどが含まれています。冬の柑橘類は、寒い季節の身体を守ってくれる成分が含まれているのですね。

大晦日 定めなき世のさだめ哉

井原西鶴

混沌とした世になって、もはや守るべきしきたりなどなくなったようだが、不思議と大晦日だけは誰もが神妙に新年を迎えようとするものだ、と大晦日の心情をうたっています。

大晦日は神社で「大祓（おおはらえ）」をおこなって罪や穢れを清め、「除夜の鐘」を鳴らして百八の煩惱を絶ちます。そして長寿を願いながら「年越しそば」をいただきます。

NHKの紅白歌合戦や「第九」も大晦日の恒例に加わります。「第九」は正式には「交響曲第九番ニ短調作品二二五」という作品名で楽聖、ベートーベンが完成させた九番目にして最後の交響曲です。この曲は、ほぼ耳が聞こえない中で作曲したといわれています。

なかでも第四楽章は、「歓喜の歌」の合唱でクライマックスを迎えます。歌詞は、ドイツの詩人シラーの「歓喜に寄す」ですが、ベートーベンは冒頭の部分を書き加えました。「おお友よ、このような音ではなく心地よい歓喜に満ちた歌を歌おう」という歌詞です。苦難を意志の力で根本から跳ね返そうとしたベートーベン、友人や怒る人のいる人生は素晴しいものだと伝えたいた気持ちも「歓喜の歌」で大爆発させたのです。自由と平和の象徴として世界中で愛されるこの曲を聴いていると、晴朗なる冬空に、世界の人々が楽しげに語りう声や、いのちを玄む地球の静かな息吹きが聴こえてきそうです。

今年一年、『歳時記のある暮らし』をお読みいただきありがとうございました。皆様、どうぞ良いお年をお迎えください。

金氏 高麗人参株株式会社

おもてなし係お手紙担当 久郷直子

